

令和4年度病害虫発生予報第1号

令和4年3月31日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

3月24日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間3月26日～4月25日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の降水量と日照時間はほぼ平年並ですが、1週目は低気圧や前線の影響を受けやすく、2週目は高気圧に覆われやすいでしょう。

I 特に注意が必要な病害虫

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	黒とう病	やや早い	やや多い	<ul style="list-style-type: none">○昨年の収穫期の調査（シャインマスカットほ場）では、新梢（副梢を含む）の発病ほ場率がやや高く、病原菌の越冬密度が高いとみられる。○本病は、好適温度がやや低いため、早春から菌が動き出し雨水に混じって伝染する。向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みであり、萌芽～展葉が早まるとみられる。□約2年間、病斑は菌を放出するので、病斑が見られる結果母枝等は、見つけ次第除去する。□特にシャインマスカット等は本病に弱いので、耕種的防除と併せ、展葉初期にチオノックフロアブル(展着剤加用)を散布する。催芽促進を行っている園では生育が進むので防除が遅れないように注意する。

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	黄化葉巻病	やや早い	平年並～ やや多い	<ul style="list-style-type: none">○3月下旬現在、一部の巡回ほ場でわずかに発生が見られる。□媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照）□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し土中に埋めるなど適切に処理する。□令和3年度病害虫防除所情報第4号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培）」（令和4年3月発行）も参考にする。 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/20322jyouhoudai4gou.pdf

II 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	せん孔細菌病	やや早い	平年並	<p>○昨秋の調査ほ場における発病葉率は、一昨年より低かったが、調査園のほとんどで発病葉を確認しており、病原細菌が越冬しているとみられる。</p> <p>○3月末から4月にかけて気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みであり、生育が前進すると病原細菌の活動も早くなるとみられる。</p> <p>□芽枯れや枝枯れ、春型枝病斑のある枝は、見つけ次第せん除する。</p> <p>□アグレプト液剤・水和剤またはマイコシールドを防除暦に従って満開直後から定期的に散布する。なお、雨で伝染するため、散布は降雨前に行う。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除を徹底する。</p>
	うどんこ病	やや早い	平年並	<p>○近年、果実被害(毛じ障害)がみられる。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みであり、生育が前進するとみられる。</p> <p>□感染期に当たる満開直後から、本病に適用がある薬剤を選択して、遅れないように防除を行う。</p> <p>□被害果は優先して摘果する。</p>
	モハモカリガ	やや早い	平年並	<p>○越冬量調査では、一部の地点で越冬成虫が確認されたが、全般的に平年並である。</p> <p>○有効積算温度による越冬成虫の飛来盛期予測（発育低温限界4.5℃、1月16日起算日 200日度 出典：愛知農総試）では、4月2日前後がピークで、モモ園への飛来も確認しているが、フェロモントラップへの誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、展葉が早まることが予想され展葉間もない葉への産卵も早まるとみられる。</p> <p>□この時期、気温が高いと産卵の機会が増え多発する恐れがあるため、食入初期（落花期）の防除を徹底する。</p>
立木類	ウメシロカイガラムシ	やや早い	平年並	<p>○園地による差はあるが、一部越冬成虫の寄生がみられる。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。有効積算温度による第一世代幼虫のふ化開始期予測（発育低温限界10℃、1月1日起算日 140日度 出典：福井園試）では、早場4月20日頃、中間地25日頃と早まる可能性が高い。</p> <p>□例年4月下旬～5月上旬が、1回目の幼虫発生ピークとなる。この時期、幼虫の発生が揃うため、防除効果が高いので防除を徹底する。</p>
	果樹カメムシ類	やや早い	平年並	<p>○昨年8月下旬以降の誘殺数は、概ね平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□果樹園には、幼果期（4月末）以降の飛来が予想され、この時期の被害は、クボミ果などの奇形になる事が多い。</p> <p>□果樹園への飛来状況は、山林の状況によって年次変動がある。夕方～夜間（寒い内は昼間）に園を見回り、飛来状況に応じ地域ごとに一斉防除を行う。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
スモモ・モモ	アブラムシ類	やや早い	平年並	<p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みであり、生育（展葉）の前進化が予想され、発生時期も早まるとみられる。</p> <p>□生育進度に応じ、開花直前（発生初期）～落花期の防除を実施する。また、発生が続く場合はウララDF等で追加防除を行う。</p>

※ミツバチ等の訪花昆虫を導入する地域もあるので、防除(主に殺虫剤)に当たってはミツバチ等への影響も考慮し、指導機関の防除指導(防除時期、使用薬剤など)に従う。

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
施設ブドウ	ハダニ類	平年並	平年並	<p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□例年、この時期以降から発生がみられる。発生は、スポット的に始まるので、発生初期を見逃さず防除を徹底する。</p> <p>□防除暦を参考に、殺ダニ剤を散布する。発生が拡大してからの防除では発生を抑える事は難しく、多発すると果実品質にも影響が出るので注意する。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>○開花期が天候不順にあたると、ハウス内での発生が多くなる。湿度がこもりやすいハウスは注意が必要である。</p> <p>□ビニールマルチの敷設と換気に努める。特に、開花期を迎える作型では徹底する。また、多湿時は暖房機および循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る。</p> <p>□落花後の花かすを取り除くとともに、発病花穂・果房は取り除き、薬剤防除を実施する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病抵抗性品種でも発病する葉かび菌が発生しているため、症状が出ていないか注意する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が低温、多湿にならないよう、適度な換気を行い、過度な灌水は控える。また、多湿時は暖房機および循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>
	コナジラミ類	—	並 (例年比)	<p>○3月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）において、コナジラミ類はほぼ誘殺されていない。</p> <p>○3月下旬現在、巡回ほ場ではほぼ発生が見られていない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。春先の気温上昇とともに増加する恐れがあるため、注意する。</p> <p>□ウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窗、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットで被覆する。出入り口は二重カーテンにするなどして侵入を防止し、ネットの隙間や経年劣化の穴がないかなど、施設の点検を励行する。</p> <p>□黄色粘着板が苗の生長点付近にくるように設置し、コナジラミ類の誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□薬剤によってはマルハナバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</p> <p>□施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かき、葉かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成キユウリ	うどんこ病	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
	アブラムシ類	—	並 (例年比)	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>
	ハダニ類	—	並 (例年比)	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや少ない。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□多発してしまうと防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は有力な伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
	ハダニ類	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□下葉の裏に多く寄生するため、生育に影響のない範囲で下葉を除去した後、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p> <p>□薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。</p> <p>□特にナミハダニは薬剤抵抗性が発達しやすく、県内でも薬剤の効果が低下している事例があるため、防除薬剤については総合農業技術センター平成29年度成果情報「ナミハダニの薬剤に対する感受性」(https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/h29seikajouhou.html)を参考に防除をする。</p>

【野菜全般】

作物	病害虫名	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
灰色かび病(半促成キュウリ・イチゴ等)	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように、過度な灌水は控え、低温に注意しながら換気を行い、施設内を適度な湿度に保つ。また多湿時は暖房機および循環扇を稼働させ、湿度の低下を図る</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□前年多発したほ場では発生に注意し、予防散布に努める。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
うどんこ病(半促成トマト・半促成キュウリ等)	—	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□発病してしまうと防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
アザミウマ類(半促成トマト・半促成キュウリ・イチゴ等)	平年並	平年並	<p>○3月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□侵入防止のため施設開口部に寒冷紗を設置する。</p> <p>□施設内外の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□薬剤によってはマルハナバチ、ミツバチへの影響があるので薬剤の選択には注意する。</p>

Ⅲ 各病害虫対策

【果樹 ブドウ】

ブドウハモグリダニ対策

石灰硫黄合剤の散布ができない地域では、ブドウハモグリダニ対策として、展葉初期にコテツフロブル 2,000 倍を用いる。この時期にチオノックフロアブル 1,000 倍を用いる場合は混用して散布してもよい。

【果樹 立木類（モモ、スモモ、オウトウ）】

ハマキムシ類対策

- (1) 開花期から、花や発芽初期の葉を綴り合わせて食害する。中齢幼虫以降になると、防除効果が劣るので適期防除を心掛ける。
- (2) ハマキムシ類の多い場合は、落花期にフェニックスフロアブル 4,000 倍を用いる。

灰星病（花腐れ対策）

- (1) 落花期に降雨が続くと発生が多くなるので、天気予報等に注意し、防除を徹底する。
- (2) オウトウの雨除けハウスでは、開花期に降雨が続く場合、ビニールを下げるなどの対策も併用する。

【夏野菜作付前の対策】

夏秋ナス 青枯病、半身萎ちょう病等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、本畑の土壌消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努める。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和2年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/138589.html

【稲】

種子伝染性病害対策

種子伝染性病害では、主にいもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病などがある。以下の点に注意し、は種前の防除を徹底する。

- (1) 発病ほ場の籾は、種子として使用しない。
- (2) 塩水選を行い、り病籾を選別し、取り除く。
- (3) 薬剤による種籾の消毒は同時防除を徹底する。
いもち病、もみ枯細菌病、ばか苗病の同時防除を行う場合は、次のいずれかの方法で行う。
 - ① 乾燥籾を薬剤（スポルタックスターナSE200倍又はテクリードCフロアブル200倍）に24時間浸漬する。
 - ② 乾燥籾を薬剤（上記薬剤の各20倍液）に10分間浸漬する。
なお防除効果を高めるため、薬液の温度は15℃以下にならないようにする。

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間25℃以上、夜間10℃以下にならないよう、保湿資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。

IV その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 水稻初期剤の使用時期は、移植または播種の7日前までであり、農薬の河川等への流出を防止するため、移植6日前以降には使用しないこと。

【令和4年度 病虫害防除基準・農薬適正使用指針】 が刊行されます。

価 格：2,500円（税込、送料無料）

販売開始時期：4月上旬

お問 合 せ 先：山梨県植物防疫協会

〒400-0034 甲府市宝1-21-20（山梨県農業振興公社内）

TEL：055-232-2760

FAX：055-223-2117

【農薬は正しく使いましょう】

（農薬の適正使用について）

https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html 参照)

連 絡 先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>